

# 大英博物館所蔵絵尽しコレクションについて

倉橋 正恵（立命館大学衣笠総合研究機構 客員研究員）

E-mail mkv24006@fc.ritsumeit.ac.jp

## 要旨

立命館大学アート・リサーチセンターの協力によってデジタル撮影された大英博物館所蔵の絵尽し約 107 点について紹介する。絵尽しとは歌舞伎や浄瑠璃といった芝居が上方で上演される際に出版されるもので、絵によって芝居の内容や配役を示すものである。大英博物館が所蔵する絵尽しについては、これまでまとめて紹介されたことがなく、その全貌は明らかではなかった。そのため、本稿では大英博物館蔵絵尽しコレクションの目録を掲載し、その特徴を述べる。さらに、本コレクションからうかがえる絵尽しの出版状況の一端を示す例についても言及する。

## abstract

The British Museum (BM) has among its collections a number of *ezukushi* (illustrated playbill) relating to kabuki and joruri plays. Only partially known to researchers to date, the whole picture or the material has not been fully reviewed. However, that was changed by the Museum's project to re-catalogue, digitalize, and document the BM's print collection, undertaken in 2014. This paper lists the BM's *ezukushi* in the historical order of when specific kabuki was played. It also discusses their characteristics and assesses their values as source material.

## はじめに

大英博物館には、107 点の絵尽しが所蔵されている。絵尽しとは京・大坂を中心とした上方地域において、芝居が上演される際に出版された小冊子で、絵によって芝居の内容や配役を示した、現代でいうプログラムのようなものである。近世期の上方歌舞伎研究には欠かすことができない基礎資料であり、その重要性から絵尽しの所蔵機関では整理及び目録化が行われている。その集大成として『歌舞伎絵尽し年表』<sup>1)</sup>が刊行され、江戸の絵本番付も含めた国内外の絵尽しの所在が明らかになっている。しかし、本稿で紹介する大英博物館所蔵の

絵尽しコレクションについては、残念なことに同書にはその情報が収録されていない。

近年になり所蔵資料のデジタル画像公開を行う機関が増えており、大英博物館でもこの流れを受け、立命館大学アート・リサーチセンターの協力のもと同館所蔵絵尽しコレクションがデジタル化され、それに伴い研究調査と目録化が行われた。個々の絵尽しの調査結果については、同館のオンライン所蔵品データベース<sup>2)</sup>において公開され、画像についても2015年中には公開される予定である。本稿ではこの研究成果を受けて、本コレクションの目録を掲載する共に、絵尽し刊行当時の出版状況をうかがわせる事例を紹介したい。

## 1 コレクションの特徴と特色

大英博物館に所蔵されている絵尽しは、天明3年(1783)から文政13年(1830)までの歌舞伎絵尽し103点、浄瑠璃絵尽し1点、子供芝居やからくり絵尽し3点の計107点である。いずれも、生物学者であったWilliam Bateson氏(1861-1926)によって、大正5年(1916)に同館へ寄贈されたものである。同氏は絵尽しの他にも、一枚物の見世物番付や江戸の歌舞伎番付などを同館へ寄贈している。

国内外の絵尽しの残存数は19世紀以降のものが、それ以前に較べて圧倒的に多い。<sup>3)</sup> こうした現存状況の中で、本コレクションを構成する絵尽しは18世紀末から19世紀前半のものであり、特に天明・寛政期(1781-1801)以前のものがほぼ半数を占める。この時期のものは、土田衛氏が前期絵尽しとするものである。<sup>4)</sup> このことから、現存している絵尽くしの中で本コレクションは比較的古い時代のもので構成されていると考えて良い。

さらに、現存している絵尽しには上演時に刊行されたものと、後に何冊かの絵尽しをまとめ、新たに表紙を付けて慰み用の絵本として販売した絵本形態のものがあることが指摘されている<sup>5)</sup>。本コレクションの絵尽しの現状は、綴糸が取り除かれた状態で一点ずつに分けられてファイリングされている。綴糸がいつの段階で除かれたのかは不明である。また、綴じられていなかったことに起因するのか、中には異なる上演のものが取り合わさって一冊となっているものもあるが、基本的にどの絵尽しも合羽摺りという印刷手法で彩色された共表紙を持つ。表紙には芝居の題名である外題と座本名があり、また芝居の場面を描いた中身には役者名が表記されている。後世に絵本として絵尽しを利用する場合には、画中の役者名を削ることが多いため、本コレクションの絵尽しは上演時に刊行された時の形態を残しているといえる。加えて、絵尽くし購入前に中身を見せない工夫として用いられた封印紙の痕跡を残すものも72点確認できる。これらのことにより、本コレクションの絵尽しは上演から時を経て製作された

絵本形式の絵尽し集を解体したものではなく、上演時に刊行されたバラのものを集めて形成されたと考えられる。

## 2 座本名の修正

本コレクションの絵尽しが上演時のものであるとすると、出版された当時の状況についてうかがい知ることができるものがいくつか含まれている。その例として、まずは絵尽しの表紙に記載された座本名の誤りとその修正方法について紹介したい。本コレクションの内、34(便宜のため、本稿末の絵尽し目録での通し番号を使用する。以下同。)<1916,0403,0.82>と35<1916,0403,0.40>は、いずれも享和元年(1801)3月に大坂の角芝居で上演された「花霞名盛扇・菊慈童花俤」の絵尽しである。共に同じ体裁の表紙を持つが、座本名の表記には異同がある。35は「中山徳次郎」(図1)、34では「中村徳次郎」(図2)である。正確な座本名は「中山徳次郎」であり、35の記述が正しい。しかし、35の表紙画像での座本名は、「中山」の「山」だけ墨の付き方が前後の文字と明らかに異なり、この一文字だけ板木に修正を加えた事が推測できる。一方の34の表紙画像では、「中村」の「村」は前後の文字の墨色と比較しても違和感がない。また、「村」の上から「山」に訂正しようと試みたとも見える痕跡も残っている。画像による判断では、「山」への修正が墨書によるものなのか、摺ったものなのか、もしくは押印によるものであるのかは判然としないが、「村」で印刷した後に何かしらの修正を加えようとしたとも考えられる。つまり、座本名を誤って「中村徳次郎」としてしまったものが34であり、「村」を「山」に訂正するため板木に修正を施したものが35であったと推測できる。<sup>6)</sup>

なお、享和元年3月刊の役者評判記『役者大功記』京大坂下巻の関三十郎評には、当初別の役者が角芝居の座本となる予定だったが、不景気のために前年である寛政12年(1800)11月の顔見



図1 大英博物館蔵、©Trustees of the British Museum  
〈1916,0403,0.40〉



図2 大英博物館蔵、©Trustees of the British Museum  
〈1916,0403,0.82〉

世興行前に中山徳次郎へと変更になったと記されている。だが、3月上演の「花霞名盛扇・菊慈童花梯」の絵尽しを刊行した板元の玉光堂は、直前の興行である1月の「けいせい忍逢測」の絵尽し32〈1916,0403,0.17.1〉も手がけており、その表紙画像を見る限り座本名の「中山」の墨色に問題は見受けられない。したがって、板元の玉光堂が座本名を知らなかったとは考え難いのだが、現在のところこれ以上のことはわからず、座本名の誤記の理由については不詳とするしかない。

また、34と35では座本名表記以外に、芝居の場面を描いた丁の構成も異なり、大切の「菊慈童花梯」の絵が挿入される場所も異なっている。この異同は構成丁の欠丁によるといった単純なものではなく、絵尽しの板木自体に修正を加えたものと考えられる。両絵尽しに描かれる場面の構成を見る限り、34が芝居の前半の場面に該当し、35が後半の場面も含めた形になっているようである。先の

座本名の異同・修正問題も併せて考えると、芝居の前半までしか上演されていない時期に出されたのが34であり、こちらが先に出たと考えられる。その後「花霞名盛扇」の全幕が出揃うと、上演に合わせて絵尽しの絵も削除・追加され、さらに表紙の座本名の誤りについても板木に修正を施して出されたのが35であったのではないだろうか。絵尽しに記載された情報に誤りが生じた場合の訂正方法を知ることができる貴重な事例、と捉えることができるであろう。

また、「花霞名盛扇」は非常に長編の世話狂言であった<sup>7)</sup>。現代の上演形態とは異なり、初日から全幕を揃えて上演するということがなかった時代である。見開きを利用した絵尽し独自の描写法については、「興行中、江戸のような幕の抜き差しがほとんど見られないため、順序や画面を抜く必要がないために実現できる」<sup>8)</sup>方法であると指摘されている。だが、同興行の絵尽しを数多く集めていけば、34



と35のように上演自体の変更に合わせて絵尽しの内容を変更していた可能性を指摘できる例も増えてくるのではないと思われる。

### 3 絵尽しの分冊と芝居茶屋の関与

次に、芝居が長編になった場合、芝居茶屋が関与して絵尽しを上下に分冊し、さらに分冊した絵尽しの刊行順序も判明するといった事例について紹介したい。本コレクションには天明9(1789)年1月に大坂の中之芝居で上演された「けいせい北国曙」の絵尽しが、6〈1916,0403,0.55.1〉と7〈1916,0403,0.17.2〉の2本所蔵されている。6は表紙を含んだ1丁のみ、7は表紙を含む1丁目に該当する丁が欠丁し、2・3・4丁目に該当する丁が他の芝居の絵尽しである32〈1916,0403,0.17.1〉と取り合わされて保管されている。<sup>9)</sup>

6の表紙には「上ノ分」とあり、1丁裏に表記される外題の下には「五冊物内／三つめまで」とあっ

て、大序である本能寺の場と嵐山の場が描かれている。また、7の最終丁である4丁裏には中之芝居の内茶屋岩井屋文蔵と板元本屋卯之助の連名の口上があり、そこには「此度之新きやうげん場数おほく御座候ゆへ絵本上下式冊ニ仕差出し申候」とある(図3)。絵尽し中に描かれる芝居の場面についても、「けいせい北国曙」の三幕目近江国醒ヶ井の場までしか描かれていない。

このように、絵尽しに口上書が掲載され、その上絵尽し出版に芝居茶屋が関与していたことがわかるのも大変興味深い。上方芝居の場合、配役を記す役割番付の板元として芝居茶屋が関わることはよく知られていることであり、「内茶屋」もしくは「内茶屋板」と記して、役割番付が芝居茶屋による刊行であることを示す例を頻繁に見出すことができる。しかし、絵尽しの出版に芝居茶屋が関与していたことを示す事例は非常に珍しいといえよう。従来絵尽しの板元として芝居茶屋の存在は考えられていなかったが、<sup>10)</sup> 今後は芝居茶屋も含めた出版活動を考えていく必要があるであろう。

さらに、大阪府立中之島図書館には、同興行の

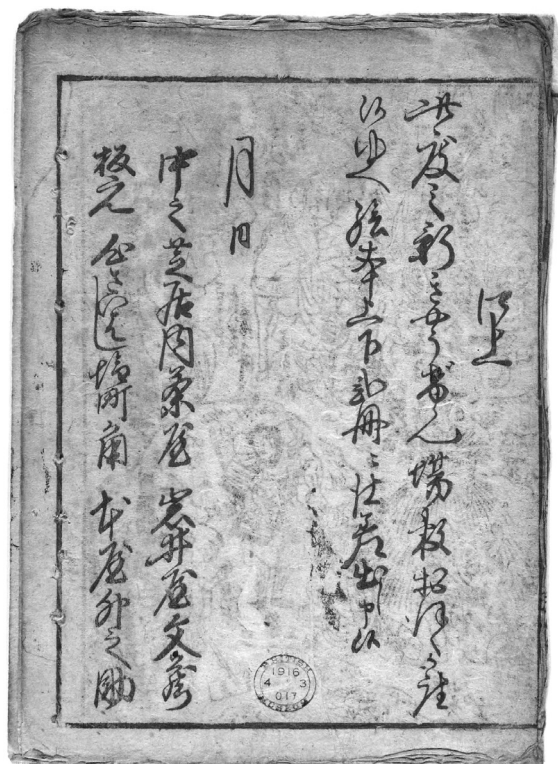


図3 大英博物館蔵、©Trustees of the British Museum  
〈1916,0403,0.17.2〉

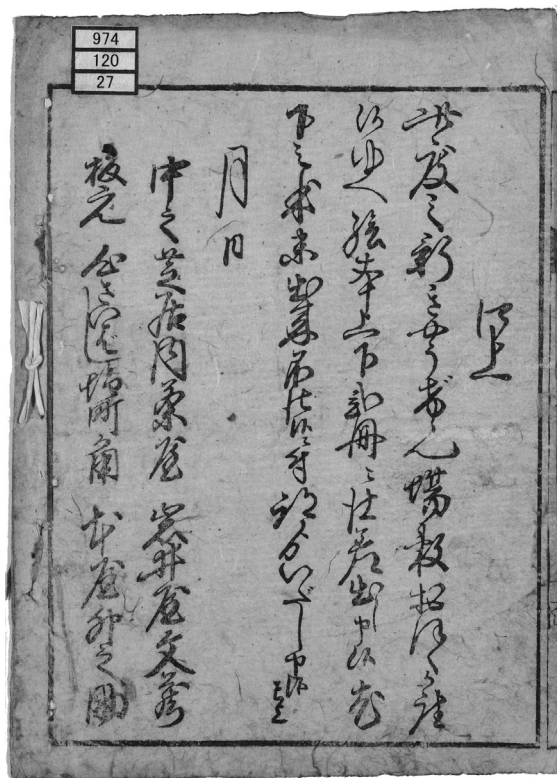


図4 中之島図書館蔵〈974-120-27〉

「上ノ分」の絵尽しが所蔵されている。<sup>11)</sup> 中之島図書館本の最終丁には、7と同じく岩井屋文蔵と本屋卯之助の連名の口上で、「此度之新きやうげん場数おほく御座候ゆへ絵本上下式冊ニ仕差出し申候

尤下之本未出来不仕候ニ付跡よりいだし申候已上」とある(図4)。両絵尽しの口上を比較してみると、中之島図書館本の二行目「尤」から三行目にかけての文字が、大英博物館本の7では削られていることがわかる。なお、早稲田大学演劇博物館にも、同興行の絵尽しで表紙に「下ノ巻」とあるものが所蔵されている。<sup>12)</sup> 演劇博物館本の1丁裏の外題下には「下ノ巻ノ本／四つめ五つめ切」とあり、中身も四幕目と五幕目の大切な場面までが3丁に渡って描かれていることから、「けいせい北国曙」の後半を収録したものであることがわかる。

「けいせい北国曙」は非常に複雑な脚色であり、場面転換や登場人物もひとときが多い<sup>13)</sup>。そのため、絵尽しを無理に一冊にするよりも、二冊に分冊した方が良いとの制作者側の判断であったのであろう。ところが、下巻の絵尽しの作成が間に合わず、急遽上巻だけを先に出版し、その断りを絵尽しの末尾に板元と芝居茶屋の連名で口上として掲載したのが中之島図書館本と考えられる。そして、下巻の制作が追いついてから、上巻末尾の口上の一部を削って出したのが大英博物館本の7なのであろう。7は絵尽しに口上が掲載される事例としても珍しい上に、絵尽し刊行当時の状況や、その制作に芝居茶屋が関与していたことを示す例として資料価値は高いと思われる。こうした絵尽しが含まれているところも、本コレクションの特色の一つであろう。

## おわりに

本稿では本コレクションの絵尽しが、後世に絵本としてまとめられたものではなく、芝居の上演時出されたものであったということを明らかにした。さらに、特殊な2件の事例から、従来の研究では指摘されていなかった歌舞伎絵尽し出版当時の様子や、芝

居茶屋の関与の一端を垣間見ることができた。

歌舞伎絵尽しの他にも、本コレクションには浄瑠璃絵尽し1点と、からくり絵尽し3点が含まれている。特に享和年間(1801-1804)頃かと思われるからくり絵尽し3(1916,0403,0.74)については、他機関での所蔵が確認されていないために注目される。概して、からくり絵尽しは国内外を問わずその残存は非常に少なく、新出のものはとりわけ稀少価値が高い。ただ、からくり絵尽し3には、表紙に記載されている外題「おどけきょうげん 昔抹香猿島敵討」「二人聲浮名隠家」「碁太平記白石ばなし」「蘭奢待新田系図」に該当するような絵がない。何らかの理由で、子供役者の演じた狂言部分を描いた丁が欠落した形で残されているのであろう。今後のからくり研究に、本絵尽しが活用されることを期待したい。

この後大英博物館のオンラインデータベースによって容易に画像が閲覧できるようになれば、本コレクションの絵尽しが歌舞伎史及び上演出版物の研究において重要な基礎資料として用いられることになるであろう。近世期の歌舞伎研究には、基礎資料として絵尽しをはじめとする種々の番付類に書かれている情報は欠かすことができない。しかし、番付は大量に残存しているが故にその整理が追いついていなかったのが現状であり、ましてや、その閲覧及び写真や画像の入手についてはいっそう困難な状態であった。

近年になり、立命館大学アート・リサーチセンターをはじめとして、早稲田大学演劇博物館や国立国会図書館、ボストン美術館といった国内外の大規模な番付所蔵機関が続々とデジタル化を推進し、オンラインでその画像を公開している。今回大英博物館もこの時流に加わることにより、所蔵機関に関わらず同じ興行の番付の比較がますます容易になることが予想できる。本稿で上演年代や劇場を確定することができなかった絵尽しも、今後の研究によって明らかになるであろう。また、本稿で考察することができなかったコレクション形成の問題や、個々の芝居における絵尽しと他の上演関係資料との詳細な比較検討については、絵尽しの画像公開を受け

て後考に俟ちたい。

## 絵尽し目録

### 〔凡例〕

- ・上演年月、地域、劇場、外題、座本、板元、登録番号、備考の順に記した。
- ・外題、座本、板元は絵尽しの表記通りに記した。
- ・上演年月・地域・劇場名以外で、絵尽しに記載されていない情報を他の絵尽しや役割番付等の資料で補った場合は〔 〕を用いた。
- ・絵尽くしに記載されていない情報や、誤記と判断できるものについては、( )の中に注記として補った。

### 〔歌舞伎〕

1. 天明4年(1784)8月、大坂、角、**義経千本桜・思花街容性**、藤川菊松、間月堂、〈1916,0403,0.67〉
2. 天明6年(1786)8月、京都、北カ、**比良嶽雪見陣立・粧水絹川堤**、早雲長太夫、(板元不明)、〈1916,0403,0.54〉、名代蛭子屋吉郎兵衛、表紙を含んだ1丁のみ。43
3. 天明6年(1786)8月、京都、北カ、**[比良嶽雪見陣立]**、**[早雲長太夫]**、(板元不明)、〈1916,0403,0.7.2〉、表紙欠の2丁のみ。43 〈1916,0403,0.7.1〉と共に保管。
4. 天明6年(1786)12月、大坂、中、**伊賀越乗掛合羽**、坂東岩五郎、正本屋清兵衛、〈1916,0403,0.35〉
5. 天明8年(1788)10月、大坂、角、**仮名草紙国性爺実録・のべの書残・福在原系図**、中山久吉、間月堂、〈1916,0403,0.10〉、表紙に「浅尾為十郎江戸表へ罷下候御暇乞相勤」とあり。
6. 天明9年(1789)1月、大坂、中、**けいせい北国曙**、市山太治郎、(板元不明)、〈1916,0403,0.55.1〉、表紙に「上ノ分」とあり。表紙を含んだ1丁のみ。31 〈1916,0403,0.55.2〉と共に保管。
7. 天明9年(1789)1月、大坂、中、**[けいせい北国曙]**、[市山太治郎]、本屋卯之助、〈1916,0403,0.17.2〉、表紙欠の3丁のみ。裏表紙に「口上／此度之新きやうげん場数おほく御座／候ゆへ絵本上下式冊ニ仕差出し申候／月日／中之芝居茶屋岩井屋文蔵／板元心さいはし塩町角本屋卯之助」の口上書が摺られている。32 〈1916,0403,0.17.1〉と共に保管。
8. 天明9年(1789)二の替、大坂、角丸、**粋の儼廓謔・連歌評判・おたつきつね**、中山猪三郎、たち花や市郎兵衛、〈1916,0403,0.53〉、2丁表に「酉の歳顔見せ狂言」とあり。
9. 寛政元年(1789)8月、大坂、角、**漢人韓文手管始**、中山福蔵、(板元不明)、〈1916,0403,0.46〉、表紙に「三保木儀左衛門出勤仕候」とあり。
10. 寛政元年(1789)10月、大坂、角、**木下蔭狭間合戦・忠臣旗揃・山伏接待**、中山福蔵、間月堂、〈1916,0403,0.45〉、表紙に「一世一代叶雛助」とあり。
11. 寛政2年(1790)7月、大坂、角、**苺萱桑門築紫鞆・極彩色娘扇**、中山一徳、間(間)月堂、〈1916,0403,0.100〉、表紙に「京 嵐 三五良 松之助 三八 出勤仕候」とあり。
12. 寛政5年(1793)9月、大坂、角、**太平記菊水之巻**、浅尾奥次郎、(板元不明)、〈1916,0403,0.31〉、表紙に「市川団蔵罷出申候」とあり。
13. 寛政6年(1794)4月、大坂、中、**菅原傳授手習鑑**、中山与三郎、玉置、〈1916,0403,0.8〉
14. 寛政6年(1794)9月、大坂、中、**大塔宮囃・容競出入湊・姫松住の江八景**、中山与三郎、玉置、〈1916,0403,0.19〉
15. 寛政6年(1794)9月、大坂、角、**八重霞花街入船**、浅尾奥治良、本屋仁兵衛、〈1916,0403,0.51〉
16. 寛政6年(1794)閏11月、大坂、角、**仮名手本忠臣蔵**、中村金蔵、(板元不明)、〈1916,0403,0.6〉、裏表紙欠。
17. 寛政7年(1795)8月、大坂、中、**仮名手本**



- 忠臣蔵、坂東岩五郎、玉置、〈1916,0403,0.5〉
18. 寛政7年(1795)9月、大坂、中、三十石鯉始、坂東岩五郎、(板元不明)、〈1916,0403,0.56〉、表紙に板元の記載あるが、かすれのため判読不明。
  19. 寛政8年(1796)1月、大坂、中、増補うす雪物語・七重絹吾妻雛形、中山一徳、玉置、〈1916,0403,0.29〉
  20. 寛政8年(1796)4月、大坂、角、艶競石川染、藤川八蔵、(板元不明)、〈1916,0403,0.87〉、板元の記載あるが状態悪く判読不明。
  21. 寛政8年(1796)7月、大坂、角、国性爺合戦・伊勢音頭恋寝剣、藤川八蔵 間月堂、〈1916,0403,0.11〉
  22. 寛政9年(1797)3月、大坂、中、扇矢数四十七本、市川団三郎、本屋清七、〈1916,0403,0.50〉
  23. 寛政9年(1797)9月、大坂、中、遠州中山染、市川団三郎、本屋清七、〈1916,0403,0.101〉
  24. 寛政10年(1798)1月、大坂、若太夫、けいせい桜花岬、三耕大次郎、藤木、〈1916,0403,0.97〉
  25. 寛政10年(1798)7月、大坂、角、一谷嫩軍記・文月恨切子・猿曳門出諷、中山与三郎、間月堂、〈1916,0403,0.39〉
  26. 寛政11年(1799)1月、大坂、角、けいせい会稽山、藤川勝次郎、間(間)月堂、〈1916,0403,0.38〉
  27. 寛政12年(1800)、大坂、角丸、恋詣石山寺・粧水絹川堤、中村市松、たちばなや丑松、〈1916,0403,0.71〉、末尾に半丁の役割番付あり。
  28. 寛政後期～享和頃、大坂、竹田か、太平記忠臣講釈、泉川崎之助、立ばなや丑松、〈1916,0403,0.33〉、末尾に半丁の役割番付あり。
  29. 寛政後期～享和頃、大坂、竹田か、北条時頼記女鉢木・木津川八景、泉川咲之助、立花やうし松、〈1916,0403,0.48〉
  30. 寛政後期～享和頃、大坂、竹田か、双蝶々曲輪日記、泉川咲之助、たち花や丑松、〈1916,0403,0.49〉
  31. 寛政後期～享和頃、大坂、竹田か、拳禰廓大会、泉川咲之助、たち花市、〈1916,0403,0.55.2〉、表紙欠の1丁のみ。末尾に半丁の役割番付あり。6 〈1916,0403,0.55.1〉と共に保管。
  32. 寛政13年(1801)1月、大坂、角、けいせい忍逢瀬、中山徳治郎、玉光堂、〈1916,0403,0.17.1〉、7 〈1916,0403,0.17.2〉と共に保管。
  33. 寛政13年(1801)1月、大坂、中、接合北国梅、山下徳次郎、(板元不明)、〈1916,0403,0.92〉
  34. 享和元年(1801)3月、大坂、角、花霞名盛扇・菊慈童花梯、中村(山)徳次郎、玉光堂、〈1916,0403,0.82〉
  35. 享和元年(1801)3月、大坂、角、花霞名盛扇・菊慈童花梯、中山徳次郎、玉光堂、〈1916,0403,0.40〉
  36. 享和元年(1801)7月、大坂、角、振袖嫩鳴神・敵討誉勝山、中山徳次郎、玉光堂、〈1916,0403,0.47〉
  37. 享和元年(1801)8月、大坂、中、和訓水滸伝・名作切籠曙、山下徳次郎、本清、〈1916,0403,0.20〉
  38. 享和元年(1801)9月、大坂、中、太平記菊水之巻、山下徳次郎、本清、〈1916,0403,0.30〉、表紙に「浅尾奥次郎芳沢いろは罷出申候」とあり。
  39. 享和2年(1802)1月、大坂、角、けいせい美鳥林、姉川亀三郎、玉光軒、〈1916,0403,0.98〉
  40. 享和2年(1802)3月、大坂、角、仮名手本忠臣蔵、姉川亀三郎、玉光軒、〈1916,0403,0.3〉、表紙に「享和二戌二の替り角の芝居」の墨書あり。
  41. 享和2年(1802)8月、大坂、角、契情花発船、姉川亀三郎、玉光軒、〈1916,0403,0.70〉
  42. 享和3年(1803)1月、大坂、中、ひらか

- な盛衰記、姉川熊次郎、本屋清七、  
〈1916,0403,0.94〉、表紙に「瀬川路考初勤  
罷出申候」「享和三亥歳正月二の替り」の墨  
書あり。
43. 享和3年(1803)2月、大坂、角、菅原伝  
授手習鑑・女鉢木、山下徳次郎、玉光軒、  
〈1916,0403,0.7.1〉、表紙を含む1丁のみ。2  
〈1916,0403,0.7.2〉と共に保管。
44. 享和3年(1803)2月、大坂、角、女鉢木、[山  
下徳次郎]、(板元不明)、〈1916,0403,0.58.2〉、  
表紙欠の1丁のみ。77 〈1916,0403,0.58.1〉と  
共に保管。
45. 享和3年(1803)7月、大坂、中、箱根靈騷  
壁仇討・のべの書置・都大踊、姉川熊次郎、  
本屋清七、〈1916,0403,0.102〉
46. 享和3年(1803)9月、大坂、中、加々見山  
花媚合・織合檻樓錦・傾城恋飛脚、姉川  
熊次郎、本屋清七、〈1916,0403,0.85〉、表紙  
を含む1丁のみ。
47. 享和4年(1804)1月、大坂、角、けいせい  
管伝授・容艶花娘道成寺、中村のしほ、玉  
光軒、〈1916,0403,0.27〉
48. 文化元年(1804)8月、大坂、角、競伊勢物  
語・新板歌祭文、玉光軒、〈1916,0403,0.14〉
49. 文化元年(1804)9月、大坂、角、芦屋  
道満大内鑑、中村のしほ、玉光軒、  
〈1916,0403,0.77〉、表紙には「瀬川路考御  
暇乞狂言ニ相勤申候」とあり。
50. 文化元年(1804)12月、大坂、堀江、けい  
せい管伝授・容艶花娘道成寺、藤川辰蔵、  
いづみや卯作、〈1916,0403,0.26〉
51. 文化2年(1805)1月、大坂、中、けいせい  
天羽衣・花競廓姿絵、芳沢円次郎、玉置、  
〈1916,0403,0.25〉
52. 文化2年(1805)1月、大坂、角、恋詣清水  
桜・江戸紫娘道成寺、嵐虎三郎、玉光軒、  
〈1916,0403,0.68〉、表紙には「坂東彦三郎  
相つとめ申候」とあり。
53. 文化2年(1805)1月、京都、北、けいせい  
い都吉野、[藤川友三郎]、鶴屋喜右衛門、  
〈1916,0403,0.79〉
54. 文化2年(1805)、大坂、角丸、競伊勢  
物語・天網島、榊山千幾、立花屋うし松、  
〈1916,0403,0.15〉、末尾に半丁の役割番付  
あり。
55. 文化3年(1806)1月、大坂、中、けいせい  
薺佳節・覚てあふ羽翼衾、山下徳次郎、玉  
置、〈1916,0403,0.99〉
56. 文化3年(1806)3月、大坂、中、鬼一法眼  
三略巻・のへの書残・道中亀山嘯・有原  
景図、嵐権之助、玉置、〈1916,0403,0.81〉
57. 文化3～6年(1806-1809)頃、大坂、竹  
田か、紅楓秋葉話、松島松三郎、(板元不明)、  
〈1916,0403,0.43〉、末尾に半丁の役割番付  
あり。絵尽しの画中には役者名の記載なし。
58. 文化4年(1807)1月、大坂、角、け  
いせい高砂松、芳沢巳之助、玉光軒、  
〈1916,0403,0.62〉、裏表紙の一部を切り取っ  
た痕跡あり。
59. 文化4年(1807)7月、大坂、中、三国無双  
奴請状・猿曳門出諷、浅尾奥次郎、玉置、  
〈1916,0403,0.69〉
60. 文化4年(1807)8月、大坂、中、和訓水  
滸伝・東鑑御狩巻、浅尾奥次郎、玉置、  
〈1916,0403,0.21〉
61. 文化4年(1807)9月、大坂、角、柵自来  
也談、嵐亀三郎、玉光軒・板木屋金兵衛、  
〈1916,0403,0.60〉 裏表紙に「嶋町 大佐」  
の墨書あり。
62. 文化4年(1807)か、大坂、竹田か、けい  
せい狭妻櫛、松島松三郎、立花屋丑松、  
〈1916,0403,0.72〉、末尾に半丁の役割番付  
あり。最終丁に「正月十二日」の墨書あり。
63. 文化5年(1808)1月、大坂、中、けい  
せい品評林、小川吉太郎、本屋清七、  
〈1916,0403,0.65〉、長秀画。
64. 文化5年(1808)1月、大坂、角丸か、けい  
せい忍逢淵・化粧六歌仙、玉川弥三郎、立  
ばなや屋丑松、〈1916,0403,0.16〉、半丁の役  
割番付あり。錯簡の可能性あり。



65. 文化5年(1808)3月、京都、北、**八陣守護城・新板歌祭文**、布袋屋梅之丞、鶴屋、〈1916,0403,0.37〉、長秀画。
66. 文化5年(1808)8月、大坂、角、**復讐高音鼓**、藤川辰蔵、玉光軒、〈1916,0403,0.61〉
67. 文化5年(1808)9月、大坂、角、**恋女房染分手綱・檀浦兜軍記**、藤川辰蔵、玉光軒、〈1916,0403,0.12〉
68. 文化5年(1808)9月、大坂、中、**八陣守護城・舞扇南柯話**、小川吉太郎、本清、〈1916,0403,0.36〉
69. 文化6年(1809)1月、大坂、中、**けいせい潮来調**、嵐亀三郎、本清、〈1916,0403,0.75〉
70. 文化6年(1809)9月、大坂、中、**軍法富士見西行・東詞廓色柄**、嵐亀三郎、本清、〈1916,0403,0.22〉
71. 文化6年(1809)カ、大坂、竹田カ、**絵本忠臣蔵**、松島松三郎、立ばなや丑松、〈1916,0403,0.2〉、表紙を含んだ3丁のみ。
72. 文化7年(1810)4月、大坂、中、**御堂の前**  
 **(しやうぶの) 救剣**、浅尾奥太郎、本清、〈1916,0403,0.76〉
73. 文化7年(1810)8月、大坂、中、**振袖天神記・花楓浪速詠**、浅尾奥太郎、本清、〈1916,0403,0.66〉
74. 文化7年(1810)、大坂、若太夫、**敵討兄弟標**、松島富士之助、本清、〈1916,0403,0.42〉、末尾に半丁の役割番付あり。
75. 文化8年(1811)3月、大坂、角、**帰命曲輪敦・紅粉色京暦**、嵐小雛、玉光軒・判木屋金兵衛、〈1916,0403,0.63〉
76. 文化12年(1815)1月、大坂、中、**秋葉権現廻船話・其姿感功桜**、片岡市松、玉置、〈1916,0403,0.59〉
77. 文化13年(1816)12月、大坂、若太夫、**九州鉤鐘岬・容艶花娘道成寺**、谷村市松、正本屋清七、〈1916,0403,0.58.1〉、末尾に半丁の役割番付あり。44 〈1916,0403,0.58.2〉と共に保管。
78. 文政2年(1819)4月、大坂、角、**けいせい忍術池・源平布引の滝**、中山勝治郎、玉光軒、〈1916,0403,0.89〉
79. 文政3年(1820)1月、大坂、筑後、**けいせい繁夜話**、中村歌之助、本清、〈1916,0403,0.86.1〉、表紙を含んだ3丁のみ。
80. 文政3年(1820)9月、大坂、中、**岩井寿千世松本・最貞願杜若東染・お染久松色読販**、浅尾与三郎、玉置、〈1916,0403,0.41〉、表紙に「十四のとし」の墨書あり。
81. 文政3年(1820)、大坂、筑後、**軍法富士見西行・隅田川続碁**、中村歌之助、本清、〈1916,0403,0.23〉 末尾に半丁の役割番付あり。
82. 文政4年(1821)7月、大坂、中、**秋花千代名松本・京紅藍杜若**、浅尾与三郎、玉置、〈1916,0403,0.64〉
83. 文政5年(1822)1月、大坂、中、**傾城染分総**、浅尾与三郎、(板元不明)、〈1916,0403,0.13〉
84. 文政5年(1822)1月、大坂、筑後、**加々見山廓写本・旧錦絵**、嵐市三郎、玉置、〈1916,0403,0.93〉 末尾に半丁の役割番付あり。
85. 文政5年(1822)3月、大坂、中、**大石摺桜花短冊**、浅尾与三郎、玉置、〈1916,0403,0.80〉、裏表紙に「大和屋次三郎」の墨書あり。
86. 文政5～文政7年頃(1822-1824)、大坂、筑後、**恋女房染分手綱・浪花文章夕霧塚・四季栄花魂胆枕**、嵐芳三郎、本清、〈1916,0403,0.88〉、末尾に半丁の役割番付あり。
87. 文政6年(1823)1月、大坂、角、**けいせい廓大門・わん久物くるひ**、中村歌路之助、玉光軒・はん金、〈1916,0403,0.91〉
88. 文政7年(1824)1月、大坂、筑後、**けいせい妹背鵜**、嵐芳三郎、玉置、〈1916,0403,0.78〉、表紙を含んだ1丁のみ。
89. 文政7年(1824)1月、大坂、筑後、**けいせい妹背鵜・大内雛形**、嵐芳三郎、本清、〈1916,0403,0.86.2〉、表紙欠の3丁のみ。末尾に半丁の役割番付あり。79

- 〈1916,0403,0.86.1〉と共に保管。
90. 文政7年(1824)3月、大坂、角、**仮名手本忠臣蔵・ひらかな盛衰記**、中村歌路之助、玉光軒・判金、〈1916,0403,0.4〉
  91. 文政8年(1825)1月、大坂、中、**もゝちどり鳴戸白浪**、嵐吉之助、玉置、〈1916,0403,0.84〉
  92. 文政8年(1825)3月、大坂、角、**風流うつぼ猿・姫小松子日の遊・義経腰越状・彦山権現誓助剣・一谷嫩軍記**、中村歌路之助、玉光軒・玉光軒判金、〈1916,0403,0.57〉、表紙には「一世一代御名残」、「中村歌右衛門相勤申候」とあり。
  93. 文政8年(1825)8月、大坂、角、**けいせい廓船謡・隅田春妓女容性**、中村歌路之助、玉光軒、〈1916,0403,0.44〉
  94. 文政8年(1825)11月、京都、北、**伊賀越乗掛合羽**、(座本不明)、泉市・和泉屋市五郎、〈1916,0403,0.34〉、長秀画。裏表紙に「書物類 品々/万かし本 いろ／＼/三ヶ津諸国 芝居番付 取次所/京西六条魚店仏具屋丁角/板元和泉屋市五郎」とあり。
  95. 文政9年(1826)1月、大坂、中、**伽羅先代萩・梵なから真似七変化**、中山与二(三)郎、玉置、〈1916,0403,0.90〉
  96. 文政11年(1828)1月、大坂、角、**天満宮花梅桜松**、中村歌女、玉光軒・玉光軒判金、〈1916,0403,0.95〉
  97. 文政11年(1828)盆替か、大坂、筑後、**濃紅葉小倉色紙・文月恨切箆**、嵐橋治郎、玉置・本清、〈1916,0403,0.96〉
  98. 文政11年(1828)9月、大坂、角、**十帖源氏物ぐさ太郎・双紋廓錦画**、沢村音松、玉光軒・判金、〈1916,0403,0.52〉、1丁裏に「物ぐさたろう様」、4丁裏に「薪三拾」の墨書あり。
  99. 文政12年(1829)7月、大坂、角、**碁太平記白石噺・棹歌木津川八景**、中村梅松、(板元不明)、〈1916,0403,0.32〉
  100. 文政12年(1829)9月、大坂、角、**松下嘉平治連歌評判・傾城反魂香**、中村梅松、(板元不明)、〈1916,0403,0.83〉

101. 文政13年(1830)3月、大坂、角、**仮名手本忠臣蔵・助六由縁江戸桜**、中村額之助、(板元不明)、〈1916,0403,0.1〉、裏表紙に「中村歌七様／市川重太郎様／中村松江様／中村歌右衛門様」の墨書あり。
102. 年代不明、大坂か、(劇場不明)、**大塔宮囃子・おてう半兵衛・艶容三国湊**、山下房次郎、(板元不明)、〈1916,0403,0.18〉、末尾に半丁の役割番付あり。
103. 年代不明、二の替、大坂か、(劇場不明)、**けいせい天羽衣**、藤川友吉、(板元不明)、〈1916,0403,0.24〉

#### 〔浄瑠璃〕

1. 天明3年(1783)1月、竹本、**新うす雪物語・大内裏大友真鳥・かゞ見山旧錦絵**、竹本太市、(板元不明)、〈1916,0403,0.28〉

#### 〔子供芝居・からくり〕

1. 寛政初年頃、(地域不明)、(劇場不明)、**菅原伝授手習鑑**、豊竹生駒太夫、(板元不明)、〈1916,0403,0.9〉
2. 享和年間頃、大坂、座摩か、**身延山恵法伝記・とほろの大臣・身延山の景色・猿が島・甚五郎内・増補日蓮記**、竹田久吉、本屋清七、〈1916,0403,0.73〉、表紙には「細工人 竹田外記 竹田縫殿助」とあり。末尾に「猿島」「甚五郎内」「増補日蓮記」の外題を記した半丁の役割番付があるが、絵尽しには該当する絵がない。
3. 享和年間頃か、大坂、座摩か、**宮巡御影参・駿術飛行梅・馮夷都万歳玉蜚・相生二挺鼓・昔抹香猿島敵討・二人聳浮名隠家**、姉川(以下破損のため判読不明)、(板元不明)、〈1916,0403,0.74〉、表紙に「からくり作者 竹田近江大掾」とあり。

#### 〔注釈〕

- 1) 須山章信、土田衛編『歌舞伎絵尽し年表』(桜風

- 社、1988年2月)。
- 2) [http://www.britishmuseum.org/research/collection\\_online/search.aspx](http://www.britishmuseum.org/research/collection_online/search.aspx)
  - 3) 前掲注(1)同書、「歌舞伎絵尽し年表 上方編」参照。
  - 4) 土田衛「上方歌舞伎前期絵尽し攷」(『考証元禄歌舞伎』、八木書店、1996年6月)。
  - 5) 前掲注(4)同論文、須山章信「『上方歌舞伎絵尽し集』について」(『江戸後期上方劇壇の研究』、おうふう、2005年11月)。
  - 6) 前掲注(1)同書では、京都大学文学部所蔵『芝居狂言合冊本』所収の当該興行の絵尽しに記載される座本名について、「中山徳次郎」とするだけで特に注記はない。
  - 7) 「花霞名盛扇」解題(『日本戯曲全集42 京阪世話狂言集』、渥美清太郎編、春陽堂、1932年8月)。
  - 8) 赤間亮著、早稲田大学演劇博物館編『江戸の演劇書』(八木書店、2003年2月)、p.182。
  - 9) 6〈1916, 0403, 0.55.1〉と7〈1916, 0403, 0.17.2〉については、もとは一冊の絵尽しとして綴じられていた可能性が高い。
  - 10) 守随憲治『歌舞伎序説』(『守随憲治著作集』3巻、笠間書院、1978年3月)の第六章番付では、大坂の番付の板元について「絵本番付(筆者注 絵尽しのこと)を除く他は、各座又は内茶屋の版元になっている。」として、芝居茶屋は絵尽しの板元ではないとしている。
  - 11) 大阪府立中之島図書館蔵、請求番号974-120-027。
  - 12) 早稲田大学演劇博物館所蔵、請求番号イ13-278-2B。演劇博物館本は『画本南行朝 式』所収のもので、寛政2年(1790)9月の京都北西芝居での「けいせい北国曙」再演時のものと思われる絵尽し(イ13-278-2A)と取り合わせ本になっている。
  - 13) 「けいせい北国曙」(『日本戯曲全集43 京阪二の替狂言集』、渥美清太郎編、春陽堂、1931年10月)。

#### [付記]

本稿を成すにあたり、松葉涼子氏と山田和人氏にご教示を賜った。また、図版使用をご快諾いただいた大英博物館、大阪府立中之島図書館に深謝申し上げます。

本研究は科学研究費(基盤研究C・課題番号26370255)の助成を受けたものです。